広島・草戸千軒町遺跡

1 所在地　広島県福山市草戸町

2 調査期間　第三四次調査　一九八四年（昭59）一一月～一九八五年一一月

3 発掘機関　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

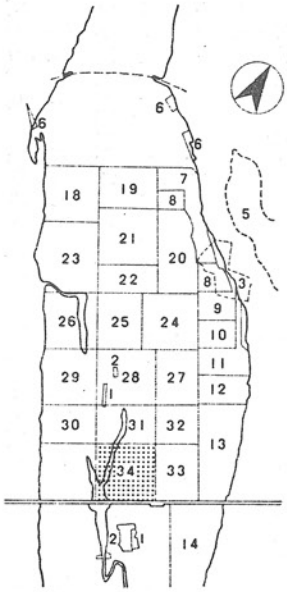
4 調査担当者　代表　松下正司

5 遺跡の種類　集落跡

6 遺跡の年代　平安時代～江戸時代（中心は主に鎌倉・室町時代）

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

第三四次調査区は、遺跡包蔵中洲の中央部に位置し、一九八二年度調査の第三一次調査区の南、一九八四年度調査の第三三次調査区の西にあたり、東西四〇m×南北四〇mの一六〇〇㎡である。



第34次調査区位置図

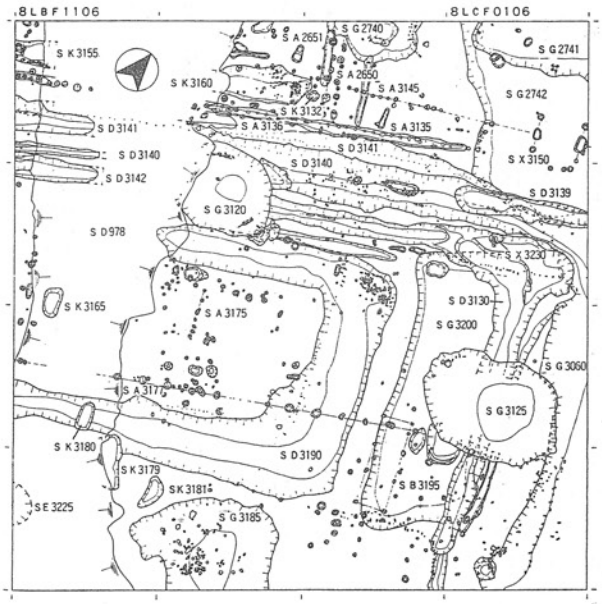
今回の調査区では、鎌倉時代～室町時代の各時期にかけて、町造りの骨格をなす柵・溝が多く検出された。調査区の北から広がるもので、室町時代後半の町囲・町割のための大規模な柵囲の南端部が明らかになり（SA二六五〇・二六五一・三一三五・三一三六・三一四五）、造替えがなされたり、四脚門（SX三一五〇）が取付いていたことが判明した。この柵囲の南側には、鎌倉時代～室町時代にかけて、五条の大規模な溝が複雑に切合って東西に走っている（SD三一三〇・三一三九・三一四〇・三一四一・三一四二）。また、鎌倉時代の環濠状の溝（SD三一九〇）や、初期の柵による町囲・町割を考える上で重要な室町時代前半の柵（SA三一七七）もみられた。木簡は、SD三一九〇、SK三一六五・三一八〇から出土している。

SD三一九〇は調査区中央部から南西部に位置する環濠状の溝で、特別の区域を画する施設とも考えられる。幅は三～四m、深さは一m前後で、北辺は西側が終結して約一七m、東辺は約一五m、南辺は約二三mで更に西の調査区へ続いている。溝内からは多量の土師質土器と、底部付近を中心に漆器・折敷・下駄・舟形等の木製品が出土している。鎌倉時代のもので、土層堆積と出土遺物から、鎌倉時代後半に掘り直しがなされたものと考えられる。

SK三一六五・三一八〇は、調査区西部の中央と南部に位置し、東西一m、南北二m、深さ〇・六mほどの同規模の土壙である。両者とも内部に箸状木製品・折敷・草履状木製品等の木製品が充満し

ており、特に箸状木製品が多量に出土している。破片の長さを二二・〇cmで一本分として計算すると、完形のものを含めてSK三一六五が約四五〇本分、SK三一八〇が約一二六〇本分にもなる。またSK三一六五からは、漆紙や漆塗りに使用した多くのへらが出土しており、中にはへらに転用された元の材に墨書されたもの（5）もある。

　SK三一八〇は、SD三一九〇が一たん埋没した段階で掘られたものと考えられ、鎌倉時代の後半頃に位置付けられる。またSK三一六五は、出土遺物の対比から、SK三一八〇より若干古い時期のものと考えられる。



第34次調査区遺構図

8　木簡の釈文・内容

SD三一九〇

(1)　「□〔ゆカ〕わ□□□□〔五カ〕
　　□あ□〔けカ〕
　　七百□□〔十カ〕□□〔たカ〕□□＜」　156×40×3　111

(2)　『□』
　　□ち□〔のカ〕たの□ちの『□』ちの□きくとの□」　(198)×(23)×5　197

SK三一六五

(3)　「九月十九日十二貫三□〔百カ〕」　(164)×25×4　100

(4)　「十月九日□ち志□□□□」　(257)×27×7　120

(5)　□　□□　202×22×5　195

(6)　□□　(60)×(14)×2　197

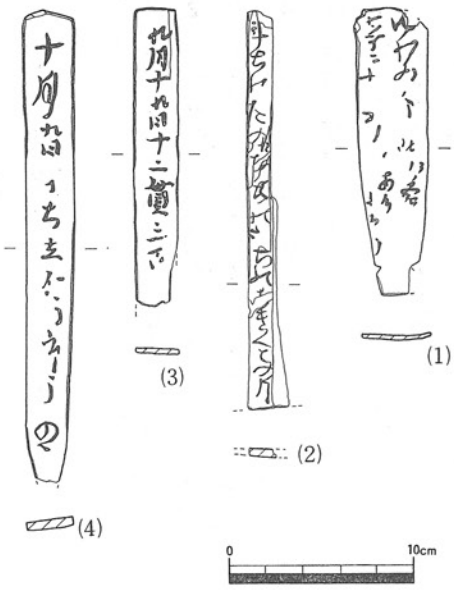
SK三一八〇

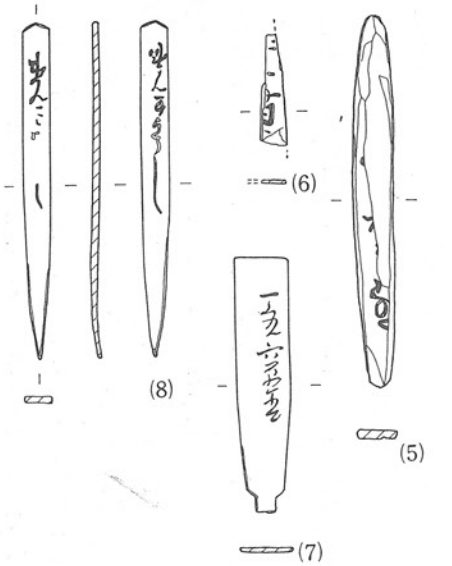
(7)　「一□〔くわんカ〕六百文にて〈」　140×29×3　111

(8)
・「〔けカ〕ん□〔迠カ〕□〔しカ〕□」
・「けん□□　□〔しカ〕」　236×16×4　120

(2)は断片であるが、書き重ねており、また「ちの」の記載が繰返されており、習書風のものである。(7)は一貫六百文の取引きを示すものと考えられる。(8)は材の全体が黒ずんでおり、判読が困難であるが、表裏に同一の文言が記されていたと考えられる。

なおSK三一六五・三一八〇は、共に木製品を中心に廃棄した土壙と考えられ、今後、これらの遺物を詳細に検討することは、出土木簡を取巻く背景を少しでも明らかにする一助になろう。





9　関係文献

佐藤昭嗣・福島政文・田邊英男「草戸千軒町遺跡第34次調査概要」(『草戸千軒』No.153　一九八六年)

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡―第三四次発掘調査概要―』(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報一九八五　一九八七年刊行予定)

(下津間康夫)